



令和の若者文化とSNSにおけるヘイト的コンテンツ
の広がり：
顕在化されにくい「チー牛」への差別の分析と自他
を尊重する教育への一提案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永浦, 拓, 藤田, 益伸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000475

令和の若者文化とSNSにおけるヘイト的コンテンツの広がり

— 顕在化されにくい「チー牛」への差別の分析と自他を尊重する教育への一提案 —

永浦 拓^{*1}・藤田 益伸^{*2}

概要

本稿では、インターネット・ミーム (Internet meme) である「チー牛」に焦点を当て、インターネットにおいてヘイト的コンテンツが広がる経緯と問題点について、インターネット、特にSNS上の投稿や流布の経緯をもとに分析した。まず、チー牛という言葉とそれに添えられたイラストは、内気な男性および発達障害に対する差別的なニュアンスを含むヘイト的コンテンツに該当することが確認された。また、チー牛がミーム化して広く用いられるようになるに伴い、その容姿や行動がみられた対象の人格や存在までも否定する使われ方がなされるようになった。さらに、冴えない男性という「顕在化されにくい」属性であるが故に、ヘイト的コンテンツであるという認識がなされにくいことがうかがえた。あらゆる他者の尊重と協働が目指される今日の学校教育においては、ヘイト的コンテンツによる悪影響を防ぐために、すべての人間の違いを認め合う姿勢および自己や他者を尊重するための社会的資質を育むことに重きを置いた取り組みが必要であると考えられる。

1. 問題と目的

平成29年・30年・31年改訂学習指導要領 (以下、新学習指導要領) では、その前文において、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが求められる」という記述がある (文部科学省、2017・2018・2019)。また、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して——全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現 (答申)』 (中央教育審議会、2021) では、「正解主義」や「同調圧力」から脱却し、多様な他者と協働するための「最適解」や「納得解」を求め続けることが期待されていることがうかがえる (奈須・伏木、2023)。「令和」と改元された2020年代においては、多様性と包摂性ある社会の形成が目指されており、2023年12月22日に閣議決定された「こども大綱」においては、こども施策に関する基本的な方針の1つとして、「こども・若者が、多様な価値観に出会い、相互に人格と個性を尊重し合いながら、その多様性が尊重され、尊厳が重んぜられ、固定的な性別役割分担意識や特定の価値観、プレッシャーを押し付けられることなく、主体的に、自分らしく、幸福に暮らすことができるよう支えていく」こと、「思想・信条、人種、民族、国籍、障害の有無、性的指向及びジェンダーアイデンティティ、生き立ち、成育環境、家庭環境等によって差別的取扱いを受けるこ

*1北海道教育大学教職大学院 (大学院教育学研究科高度教職実践専攻) 旭川

*2人間総合科学大学人間科学部

とがないようにする」ことといった、多様な人格・個性の尊重と権利の保障することが記述されている。

一方で、令和の日本は2010年代からのインターネット利用の急速な拡大によって、子どもにおいてもインターネットで情報を得たり、発信したりすることが容易な時代を迎えている。それに伴い、子どものインターネット利用に関する課題が指摘されている。OECD（2022）は、このようなデジタル環境で直面するリスクの1つとして、「ヘイト的なコンテンツ」の受信や公開を挙げている。ヘイト的なコンテンツとは、宗教、人種、性別、障害、性的指向、またはジェンダーアイデンティティに関する内容への嫌悪や差別につながるものであり、写真、単語、ビデオ、ゲーム、シンボル、楽曲などのさまざまな形式をとることがある。本邦においても、内閣府（2022）「人権擁護に関する世論調査（令和4年8月実施）」において、インターネットに関する人権問題として、他人に差別をしようとする気持ちを起こさせたり、それを冗長するような情報が掲載されたりすることを問題と感じている者の割合が42.8%であったことが報告されている。

近年では、これまでの文化的背景や社会の認識不足から不平等な扱いを受けることが多かった女性や障害者に対する差別や誹謗中傷に関するコンテンツは問題があるとみなされ、インターネット以外の報道でも取り上げられることが増加している。一方で、久光（2023）は、男性についてはこれまで日本において一般的に望まれてきた「男らしさ」という男性像が故に、それらに該当しない男性に対する差別的な発言や態度は前者と比較して問題として取り扱われることは少ないと論じている。久光論文では、このような男性について「弱者男性」という言葉を含むSNS上の発言を取り上げただけで、弱者男性という言葉がいわゆる「モテない男性」と同義で扱われており、発達障害、実行力や経済力がない、かかわりたくないといったネガティブなラベリングや発言がみられることを報告している。インターネットにおけるヘイト的なコンテンツとして取り上げられたり着目されたりする頻度や程度が、対象となる宗教、人種、性別などによって異なることは、かえって差別や偏見を増長させることにつながるといえる。また、近年では著名人や法人関係だけではなく、一般人もネットにおける炎上の対象となることが増加傾向にあり、その内容も、反社会的行為や規範に反した行為や言動のみならず、何かに対する批判を行った結果として（発信した側にその意図がなかったとしても）特定の層を不快にさせたという理由から起こる（山口、2015）。さらに、炎上の中にはそれらの行為そのものだけではなく発信者の人格や立場などを攻撃するような案件もみられるが、それらは発言した者の「自己責任」と捉えられる場合も少なくない。もちろん、受け手が傷つき不快になったという事実は見過ごされてはならないことであり、発信した者はインターネット上での自身の行為を振り返ることが必要であることは言うまでもない。しかしながら、今日の日本社会および学校教育が、多様な価値観が尊重され、協働し社会を創ることを目指しているのであれば、受け手としてインターネットを利用する場合であっても、まずはインターネット上の他者の行為・発言・価値観が「なぜ自分とは異なるのか」を理解する姿勢を醸成していかなくてはならないだろう。

そこで本稿では、インターネット・スラングおよびインターネット・ミーム（Internet meme）である「チー牛」に焦点を当て、インターネットにおいてヘイト的なコンテンツが広がる経緯と問題点について分析したうえで、考察として、子どもたちへ及ぼす影響と学校教育における予防的な取り組みのあり方について論じる。

2. 「チー牛」とは何を指すか

「チー牛」とは、「チーズ牛丼」を略したインターネット・スラング（インターネット・ミーム）である。2018年7月19日、ネット掲示板「5ちゃんねる」の「なんでも実況J板」に立てられたスレッド「なんJ 昼のニート無職部 part3」にて、「就労移行支援で面白かったのは利用者の若い男が皆同じ顔をしてた事」という本文と共に、「眼鏡をかけた表情の暗い青年が『三色チーズ牛丼』を特盛かつ、温玉のトッピングを追加注文する」というイラスト（図1）が添付された。このイラストは、もともと2008年当時、とある高校生が自分をモデルに描き、それを自身のブログに掲載したものとされる（J-CASTニュース、2020）。見た目が地味で冴えない青年の容貌が、「注文台詞を早口でボソボソ喋ってそう」と、引っ込み思案で内気な男性の特徴を的確に捉えたとされ、同スレッドをきっかけに、イラストの男性の外見的特徴と「チーズ牛丼」、そして地味で内気な男性像が結び付き語られるようになった。

引用元の記事（J-CASTニュース、2020）によれば、2019年4月には、ネット掲示板の投稿をまとめたサイトで「とろ〜り3種のチーズ牛丼とかいう陰キャ専用牛丼」というスレッドが掲載されているように、「『陰キャ』は『チーズ牛丼』を食べる」というジョークのような風潮が醸成され、「あなたはあのイラストの『陰キャ』とされる男性のような雰囲気や顔をしていそうだな」という、相手をけなすための「煽り」として「チーズ牛丼」が用いられるようになったと分析している。他方で、他のインターネットニュース記事（Asagei Biz、2020）では、発端と考えられる書き込みは、投稿者が就労移行支援という場面でのエピソードについて言及したものであり、「地味な人物を揶揄」という程度のものではなく、発達障害に対する差別的なニュアンスを含んでいることを指摘している。このように、インターネットで広がりを見せているチー牛は、いわゆる「陰キャ」（後述）の男性、さらには発達障害に対してネガティブな印象を示す言葉として広がっており、さらには図1のイラストの存在から、ルッキズムの観点で見ても、ヘイト的なコンテンツに該当すると考えられる。

3. インターネットにおける「チー牛」の用いられ方の変遷

ここでは、「チー牛」という言葉の用いられ方について把握するため、本邦でもユーザー数が多くポピュラーであるSNS・X（2023年7月まではTwitter）の投稿をもとに、その変遷について明らかにすることを試みる。2024年9月1日～9月21日までに、Xにおける投稿（ポスト）の検索システム



図1 チー牛のイラスト（イラスト作者のXより引用、2024年9月27日取得）

を利用し、「チー牛」というキーワードを含む投稿について検索を行った。なお、本稿で取り上げる投稿は、「いいね」が500以上の公開投稿に限定する。以下、本文中のXにおける投稿の引用を、【】で表記する。

まず、2018年7月19日～2020年3月31日の期間では、発端と考えられる掲示板の投稿があった直後から1年半くらいまでは、該当する投稿はみられなかった。一方で、これまでインターネット・スラングとして使われてきている「おたく」や「陰キャ」（後述）といった用語は、それぞれ無数の投稿がされていた。よって、当初は一部の境界のみで使用される用語であったことがうかがえる。

チー牛の投稿に「いいね」の数が多くみられるようになったのは、2020年4月以降と考えられる。この時期は、中国・武漢で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行とそれに伴う自粛生活により、多くの人々が長期間の外出制限を余儀なくされた時期である。これにより、小・中・高等学校・大学を含む学校は臨時休業や短縮授業の措置をとったほか、部活動、アルバイト、外出などの制限や、リモートでの活動の推奨がなされるなど、若者の生活は大きく変化した。特にCOVID-19状況下では、大学生がSNSや動画サイト、インターネットを利用する時間が増えたという知見からも（例えば、Noda et al., 2022など）、若者層がチー牛という言葉に触れる機会が増えたことが要因の1つと考えられる。上述の記事（J-CASTニュース、2020）においても投稿の検索がなされており、4月中旬から100件以上のチー牛投稿がみられはじめ、6月4日にはチー牛というワードだけで2万件以上のリポスト（リツイート）を獲得していると報告している。用法については、【チー牛に生まれてきたやつの人生難易度ハードすぎ】、【チー牛の特徴「眉毛を整えない」...】といった投稿内容から、チー牛は引っ込み思案で内気な男性をからかう、あるいは自虐的な言葉として使われていた。ここから、2020年4月前後の段階では、チー牛は掲載当初と同様の意味合いを有していたと考えられる。

チー牛の用法の変化が訪れたのは、2020年7月頃であると推測される。その背景として、同年7月28日に「セガなま～セガゲームクリエイター名越稔洋の生でカンパイ～」と題したインターネットライブ動画配信サービスによる番組内でのエピソードが挙げられる。番組では、当時のセガ取締役CCO（Chief Creative Officer）の名越稔洋氏が、人気パズルゲーム「ぷよぷよ」のeスポーツ選手に対し、その容姿を指して「チーズ牛丼食ってそうな感じ」と発言し、スタジオは笑いに包まれた。一方で、配信がなされていたYouTubeでは7月30日昼の時点で、同配信の低評価（953）が高評価（78）を大きく上回り、視聴者からは「SEGAに対して多大な貢献をしてくれたゲーマーの方々を公然と侮蔑」したなどと批判され、セガは公式ホームページ上から謝罪文を掲載する事態となった。これは、チー牛が自虐や冗談めいた煽りではなく、明確に他者を罵倒・侮蔑といった目的で使用していると多くの視聴者が判断した結果である。この件を逆に考えると、多くの視聴者はチー牛という言葉は、主に自虐・煽りに使用するものであって、他者をけなす目的で使用するものではない、という共通認識がされていたことが伺われる。この直後では、チー牛が差別用語化されることを懸念する投稿が散見されている。当初からチー牛を使用するユーザーとみられる意見として、もともとネガティブな意味を含むことを認識し、その上で意図的に使用していたことが推察される。しかし、コアなインターネットユーザー以外の多数の視聴者がいる大手ゲーム企業のインターネットライブ動画配信サービスという場面において、チー牛は他者を侮辱する意図として使われる事例が拡散され、一部のコミュニティ

における「内輪ネタ」として自制された使用を超えた使われ方がなされるようになった。

その後は、東京大学においてミスター・ミスコンテストの開催に伴い「顔で判断するな」というルッキズム批判の立て看板の設置に対し、チー牛の絵が描かれた反論の立て看板が設置された件について、Xでも論争が生じている。また、2020年8月に香港の民主活動家・黄之鋒氏の外見を指し、「周庭の隣にいるチー牛」と煽る投稿がなされている。これに対し、周庭氏は8月28日にこの件「香港人に日本語を紹介しながら逮捕されたことについて語る」という自身の投稿動画内において取り上げ、チー牛という言葉が「男性が暗くてオタクっぽいという意味」として紹介された。その他、同時期に投稿された投稿には、【チー牛は努力しても無駄】、【チー牛とは関わりたくない】と客体化されたチー牛に対するストレートな侮蔑を込めた投稿が多くなる。【チー牛という言葉がオタクとかチー牛が自虐で使ってるうちは面白さがあったけど、夜職女性っぽいのがチーチー言い出したあたりから純然たるヘイトスピーチになってきたので面白くなくなってきた】という投稿に示されるように、当初の意味合いを知る者からは、チー牛という言葉自体を忌避する様子が伺われはじめた。

以上のようにチー牛は、2020年から現在までネガティブな意味合いのワード・差別用語として少しずつ社会全体に普及してきた。近年では、Xの投稿を引用したうえで公開できるユーザー生成コンテンツ（user-created contents）型ウェブサービス「Togetter」においては、チー牛の用法が差別的であることを指摘しているものもみられる。例えば、『『チー牛』への根拠なき誹謗中傷の嵐』（Togetter、2024）では、チー牛という言葉がなぜ侮蔑、誹謗に使用されたのかに関する投稿がまとめられており、掲載当初とは全く意味合いが異なる、根拠無くチー牛に対して批判的な論が展開されていることが見て取れる。またその内容は、チー牛とされる対象の容姿に対する指摘にとどまらず、性格や異性への接し方に対する批判にまで至っている。一例をあげると、【口元がキモイ】、【自分で稼いで自分の生存のために何事かをしたことがない人特有の、子供のような顔】、【一般的にはメガネじゃなくてコンタクトの方がウケがいいのかとかまで思考を進めることができない】、【顔つきがセロトニン足りない顔してて居るだけで周囲をイライラさせる顔なんだよな。いつも不安な顔してるといじめたくなるし。】、【差別されるようなチー牛は、人の言うことも聞かないし他者に対する配慮もなく社会性が欠けてるんだわ、それらができてりゃ差別されないし、他者を配慮しないチー牛に配慮する理由なくね？ギブアンドテイクって知らん？】、【見た目がチー牛だからといじめるのはどう考えてもいじめる奴が悪いが、見た目以外にいじめられる要因がある可能性が高い。】、【チー牛男、存在そのものが性加害なんだよ。】、【DVモラハラはめっちゃくちゃチー牛多いんだけど、何が見えてるんだろ…】など、あんまりである。

4. 他の類似語との比較

チー牛という言葉がインターネット上で流布する以前より、特定の特徴をもった男性（に限らない場合もある）を揶揄する言葉は存在していた。「おたく」、「陰キャ」、「コミュ障」といった言葉が代表的である。

「おたく」は1980年代のサブカルチャーから広まった用語で長く使われている。ただし、おたくの意味も時代ともに変遷し、現在は肯定的、否定的の両面で使用されている。おたくの否定的な意味合いが薄れた理由として、若者がおたくという言葉を多用してメジャーカルチャーにまで使用されるよ

うになったこと（例：「服オタク」、「音楽オタク」）、政府が観光資源の一環としてクールジャパン戦略を行い、おたく文化がメジャー化したことが挙げられる。あわせて、近年インターネット上では、アイドルやアニメキャラクターを愛好することを、おたくに代わって「推し」と表現するように変化してきている。株式会社クロス・マーケティング（2020）は、COVID-19の影響で新たに推しができたと答えた人の割合は約4分の1となり、20代では4割を超えたと報告している。推しという言葉にはおたくが本来持つ否定的な意味合いがなく、むしろ自分の拠り所になりうる何かを持つ＝個性的な自分を表現する言葉として若者が公言するようになったという見解もみられる（稲田、2021）。推しの広まりに合わせて個性的な推しを持つおたくが再評価され、おたくを侮蔑する場合は「キモオタ（キモイ＝気持ち悪いオタク）」などと否定語を追加することが増えている。

「陰キャ」は陰気な性格の人を指し、陽気な性格の人を指す「陽キャ」と対比させて使用される。1980年代から1990年代半ば頃に使われていた「ネクラ」と「ネアカ」に近い言葉である。陰キャは引込み思案で内気な性格の人で、そこから転じてスクールカーストで、下位に属する「イケテない」人や集団を指すこともある。「コミュ障」は、元々は、「コミュニケーション障害・コミュニケーションの障害」の略称であり、会話に自信がなくコミュニケーションに難がある人を指し、医学的な診断とは必ずしも一致せずに、くだけた形で扱われている（松崎、2017）。これらの言葉もチー牛と同じく、自虐あるいは他者へのネガティブな評価として使用される。しかし近年は、陰キャ・コミュ障のキャラクターを好意的に取り扱うメディアが登場している点は興味深い。例えば、アニメ化された漫画の「私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い!」、「ぼっち・ざ・ろっく!」の主人公は、いずれも典型的な陰キャ・コミュ障の女子高生である。これらの作品には、キャラクターのコミュニケーションが苦手な点を侮蔑するのではなく、微妙に噛み合わない会話やすれ違いなどを丁寧に描写しつつ、彼女たちが少しずつ成長していく様子に、「共感できる」、「面白いけど切ない」といった感想が寄せられ人気を博している。また、陰キャと陽キャの性質を併せ持つ「ハイブリッド陰キャ」といった言葉や、漫画・アニメ「鬼滅の刃」の主人公の竈門炭治郎は「陽（キャ）のコミュ障」と評されたりしており、おたくと同様に肯定的・否定的解釈が混在するような状況になっていることがうかがえる。

5. 「チー牛」がヘイト的コンテンツとして広がった背景

チー牛が陰キャ・コミュ障と決定的に異なる点は2つである。第一に、チー牛を代表するイラストによって視覚化された点である。もともとXは、SMSの送信上限の関係上140文字の文字制限を受けるプラットフォームであった。文字制限がある中で、人目を引く言葉や表現を挿入し、不特定多数から取り上げられることが「バズる（話題となる）」要件であった。あわせて、Xには多種多様な人々の雑多なつぶやきが流れており、無数の情報から自分にとって有益な情報を取捨選択する場合は、論理的な思考による選択よりも直観的・感情的な思考による選択が優位に働きやすい。こうした条件下において、蔑称としての効力を無くしたおたくに代わる言葉としてのチー牛の語呂の良さと、何よりも若者の身近に存在する男性をイラスト化して対提示された点が非常に大きいと推測される。人間の五感による知覚のうち視覚は8割と視覚優位であることから、近年のマーケティング分野ではこの点を意識して情報をビジュアルで表現し、少ない量で情報をわかりやすく伝えるインフォグラフィック（infographic）が流行している。こうした流れの中で、チー牛のイラストは弱者男性（はこういうものだと多くの人が考える）像を的確に映し出したものとして流行したといえる。

第二に、その対象は男性に限定されている言葉だという点である。元々、チー牛イラストにある視

覚的イメージから自虐、侮蔑の用法が主流であった。ところが2024年時点では、見た目を揶揄するものではなく、いわゆる弱者男性に該当する男性の言動、性格等の内的属性についての言及が増加している。言い換えると、見た目の一致はそれほど重要ではなく、投稿者にとって男性にまつわる不快なエピソードがあった場合に、「チー牛が悪い」と断じるパターンが増加している。チー牛の用法の変化に対して、Xでは、【牛井店のメニュー→自虐的に使われるメガネ、無造作な髪→アデノイドの男性のスラング→いわゆる弱者男性、成人しても童貞で不潔、根暗な男性のスラング→容姿の指定はなし→女性から主観的に見て不快な男性、言動が不快ならば性経験の有無→社会的地位、容姿不問】と、原形をとどめていないという指摘や、【チー牛の定義が広がりすぎて収拾つかなくなってきたw不快な男性が全部チー牛になってしまった】といった見解が寄せられている。トイアンナ(2024)は、男性＝強者という思い込みから弱者男性はいくら叩いても良いという風潮に警鐘を鳴らす。反対に、際限ないチー牛への攻撃が女性に適用される可能性は少ない。一例として、2022年12月2日にX上で「チー牛の女版」のイラストが掲載された件があげられる。これに対して、【昔これすぎて胸がチクチクする もう許してくださいえー】、【低身長以外はこれワイのことですね。血涙流してます。】といったコメントが寄せられている。一方で、【壊滅的に見た目が悪い訳ではない、平均よりやや下から上くらい】ってというのがわりかし重要なポイントだと思う。】というコメントもみられ、本当に女性を傷つける投稿は忌避すべきという不文律が垣間見られた。その後、チー牛の女版イラストは、男版と比べてほとんど話題に上がらなくなった(Togetter, 2022)。

「男性＝強者」であり「女性＝弱者」であるというステレオタイプな認識から、チー牛に関する投稿には【これは大学での実体験なんだけど…、情けで優しくすると急につけあがる、距離感の詰め方が異常、仲良くなっても面白くなくて不快、卑屈かつ攻撃的な発言が多い、恋人いると知ると豹変する、拒否すると裏切り者扱いでストーキングまでしてくる、女への怨みが凄い、なので全然有害だし公害に近い】という具合に、チー牛の被害に遭ったという被害者性を強調するものが多くみられる。これが、特定の相手との関係性の中で起きた個別のエピソードとしての投稿を超えて、チー牛に該当する者に多くみられる行動的な特徴であるという文脈で言及されている点は、差別的であるという見解は得られにくい。さらに、チー牛について【よほどの奇形じゃない限り、たいていのチー牛はメガネ外して眉毛と髪型整えて、服装を綺麗にすればチー牛は脱してフツメン(筆者注：普通の容姿の男性という意味)くらいにはなれるはずなのに何故しないのか。】という投稿を引用して投稿された【ルッキズムと差別思想に塗れたこのポストが多くの人に支持されている事をよく覚えておきたいと思う。】という表現こそが、チー牛の根底にある問題を明確に示しているといえる。すなわち、チー牛の容姿の問題を強調し「本人の努力不足」であるという自己責任論であるという考えに疑問を持たない風潮は、自分とは異質な他者であっても、それを批判したり差別をせず差異を認めようとする多様性の尊重とは程遠い状況にあると考えられる。チー牛の本来の用途に含まれている「冴えない男性の生きづらさ」という「顕在化されにくい」属性に対しても、他の属性と同様に理解をしようという姿勢が必要なのではないか。

6. 考 察

本稿では、「チー牛」というインターネット・スラングの定義をふまえ、インターネット上の広がり、経緯と問題点について、SNS等の投稿をもとに分析してきた。ここでは、子どもたちへ及ぼす影響と学校教育における対応策について議論を深めたい。

まず、チー牛という言葉は、元来容姿および発達障害に対する侮蔑や偏見を冗長する意味合いを含んでいること、さらに言葉だけではなくイラストという媒体で広がりを見せていることから、ヘイト的コンテンツとして社会に流布していると判断された。また、当初は単純に「モテない男性」を指す言葉ではなく、様々な生きづらさを抱える者としての意味合いを含んだものと理解されていたが、2024年時点のチー牛の濫用による弱者男性への攻撃は、モテない容姿や内向的・内気というコミュニケーションの苦手さへの侮蔑を超えて、その人格と存在の否定にまで至っている。チー牛に対する盛り上がりは炎上の一種ともいえるが、山口（2015）の定義とは異なり、発信者ではなくチー牛とされる者の責任に着せられる傾向がある点が大きく異なる。発信者が、自分が不快に感じた対象をチー牛という言葉でなじり、それに賛同する者が応答することで盛り上がりを見せる。表1は、いじめの構造とチー牛を用いた構造を比較したものである。神村（2015）は「制裁型」のいじめの特徴として、加害者は被害者に不快感を生じさせた結果として、いじめを行っているという正当化がなされていることを論じている。SNSにおけるチー牛を用いた侮蔑でも、その内容よりもイラストのインパクトの強さから、容姿を指して「変わろうと思えば変われるのにそれをしないのだから自己責任である」という正当化がなされていると考えられる。また、いじめの観衆や傍観者がいじめ行為を冗長している

表1 いじめの構造とチー牛を用いた侮蔑の構造

	いじめ	SNSでのチー牛を用いた侮蔑
加害者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 八つ当たり ・ 他者をおととして自尊感情を維持 ・ 不満や不信の発散 ・ 注目されたい ・ 怒りによる自己防衛 ・ 不満やストレスのはけ口として起こりがち 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対象の存在は不明（架空のチー牛に該当する存在や顕在化されにくい属性そのものに対する不満や不信） ・ 「いいね」や「閲覧数」などの社会的称賛の獲得欲求 ・ 不満やストレスのはけ口として起こりがち
被害者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 容姿などの顕在的特徴 ・ 学習面や運動面などの能力の差異 ・ 異質なものであるが故にスケープゴートとして排除される 	<ul style="list-style-type: none"> ・ チー牛に該当すると想像された男性 ・ 面識のない者や実在しない者も含まれる
観衆	<ul style="list-style-type: none"> ・ 不適応を生じた子どもに影響されて周囲の子どもが同調 ・ 同調したくないと思っている子どもであっても、力関係で弱い立場にいる場合は、自分の身を守ることに専念し余裕がなくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「いいね」や引用投稿、侮蔑に対する肯定的コメントを投稿 ・ コンテンツとして「面白そう」という理由からも観衆として侮蔑に加担しやすい
傍観者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 味方すると自分がやられる ・ 被害者にも悪いところがある 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当該投稿を閲覧するが無反応の者 ・ 無関心（騒動に巻き込まれたくない、関わりたくない、興味がない）

※いじめの構造については、森田・清永、1994；文部科学省、2007；神村、2014などを元に筆者らが作成

という構造論（例えば、森田・清永、1994など）と比較すると、SNSでは、実際のいじめと異なり被害者の姿が直接見えづらいこと、またイラストやエピソードが前面に出された投稿であるが故に、差別や誹謗中傷ではなく娯楽的なコンテンツとして消化されやすい。また、特にインターネットという環境では、その匿名性などからより開放的に自分を表現してしまうことや（Cooper, 2005）、また、

個人的自己への焦点化が欠落することにより社会的アイデンティティによる行動を引き起こしやすくなることが指摘されている（Reicher, 2005）。したがって、子どもたちがこのようなヘイト的コンテンツを閲覧した際には、自覚なく容易に観衆として加担しやすくなる、投稿者と同様の差別的な思想に同調しやすくなってしまうことが想定される。さらに、その影響が日々の学校生活におけるいじめの冗長に結び付くことも懸念される。

生徒指導提要（2022）では、情報リテラシー教育は課題未然防止教育として専門家との連携を重視しながら年間計画に位置づけ実践するように提言されている。インターネットにおけるヘイト的コンテンツについては、インターネット上の心理学的特徴について学び、対面よりも他者を傷つけることや権利を侵害するような行為に至る可能性が高いことを自覚させることが重要である。しかし、インターネットを利用する限り、自身が発信者とならなくとも、ヘイト的コンテンツに触れる可能性を完全に除去することはできない。したがって、インターネットによるコミュニケーションの問題点や危険性を訴える教育だけでは、その影響を完全に除去することは難しいといえよう。いじめ未然防止教育においては、いじめを許さないという姿勢や人権尊重といった価値観に対するアプローチだけではなく、いじめの要因とされている心理社会的な側面（ストレス、対人関係スキル、自己肯定感）に焦点を当てた取り組みも行われてきている。どのような対象であってもラベリングをすることなく、個々の差異を受け入れようとする姿勢を醸成することに加え、自己や他者を尊重するための社会的資質を育むという、発達支持的な視点をもった教育が、子どもたちがヘイト的コンテンツを目の当たりにしても影響をされないような価値観をもってインターネットを利用できることにつながるのではないかと考える。

次に、チー牛として批判される対象は、いわゆる弱者男性という、これまでその権利や存在を尊重すべきと謳われてこなかった属性であることが特徴的であるとまとめた。性による差別、障害者への差別については、その歴史の反省と現代における平等・公平な社会を築くためのあり方について、差別を未然に防ぎ速やかに解消するための教育が実践されており、教科教育でも取り上げられ、子どもたちがその問題点に触れ学ぶ機会が多い（例えば、中学校学習指導要領（平成29年告示）社会編：公民的分野）。しかし、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な他者を受け入れることを目指す今日の学校教育においては、人種、ジェンダー、障害といった顕在的な差異にとどまることなく、すべての人間の違いを認め合うことを強調するような教育が必要でないか。顕在的な差異を前面に出しすぎて多様性や協調性の教育をすることは、その差異に当てはまる者だけが尊重されるべきであるという誤った解釈をもたらす可能性ばかりではなく、意図せずとも当てはまる者は「守るべき者」＝「弱者」とみなしてしまい、その結果として他者の可能性や権利を侵害してしまうことに結び付いてしまう恐れもある（Halifax, 2018；2020）。権利を擁護すべき対象を型どおりに弱者の枠に当てはめるだけでは、弱者とその他という差別がより一層顕在化する可能性がある点にも配慮する必要がある。

最後に、本稿の限界と今後の課題について述べる。本稿では、Xをはじめとするインターネット上の投稿を分析の対象としているが、具体的な投稿数や閲覧数といった量的な側面の調査は行われていない。また、本稿ではチー牛を、目に見えづらいヘイト的コンテンツの代表的な例として取り上げたが、インターネットでは日々無数の発信がなされ、そのトレンドの推移も目まぐるしく変化している。そこで、今後は誹謗中傷や差別に該当すると思われるインターネット・スラングやミームにはどのよ

うなものがあるかを再定義したうえで、その流布の推移と子どもたちの認知度などを併せて検討することで、子どもたちのヘイト的コンテンツによる悪影響を効果的に予防するための指針を示し続けていくことが求められる。加えて、本稿で提言した内容をもとにした具体的な教育実践を積み重ねることで、調査や研究による理論化を重視するあまり対応が後手に回ることのない即時的な対応を共有していくことも併せて期待したい。

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- Asagei Biz (2020). 一般社会では使用厳禁!? ネットスラング「チー牛」流布の意外な弊害とは?. <https://asagei.biz/excerpt/17513> (2024年9月27日取得)
- Cooper, G. (2005). Cyberspace bullying. *Psychotherapy Networker*, 29(3), 19-22.
- クロスマーケティング (2020年11月5日). 「推し」に関する調査. <https://www.cross-m.co.jp/news/release/20201105/> (2024年9月29日取得)
- 中央教育審議会 (2021年1月26日). 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申). https://www.mmex.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (2024年9月27日取得)
- 久光美羽 (2023). ジェンダー化された社会と男性の生きづらさに関する考察—「弱者男性」をめぐる言説と表象の分析から—. 奈良県立大学研究報告, 15, 56-83.
- 稲田豊史 (2021). 「オタク」になりたい若者たち。倍速でも映画やドラマの「本数をこなす」理由. <https://gendai.media/articles/-/83898?page=2> (2024年9月29日取得)
- J-CASTニュース (2020年6月18日). あの「チー牛」について、すき家に聞いてみた——ネットでなぜか流行語化. <https://www.j-cast.com/2020/06/18388228.html?p=all> (2024年9月27日取得)
- 神村栄一 (2015). 中1ギャップの正しい理解と対応. *子どもの心と学校臨床*, 12, 26-35.
- 経済協力開発機構 (OECD) (編著)・LINEみらい財団 (監訳)・齋藤長行・新垣円 (訳) (2022). デジタル環境の子どもたち——インターネットのウェルビーイングに向けて. 明石書店.
- 松崎良美 (2017). “メンタルヘルス・スラング”を定義する. *津田塾大学紀要*, 49, 197-216.
- 文部科学省 (2007). 「いじめを早期に発見し、適切に対応できる体制づくり」—ぬくもりのある学校・地域社会をめざして—子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議まとめ (第1次). https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123.htm (2024年9月29日取得)
- 文部科学省 (2017). 平成29・30・31年改訂学習指導要領 (本文, 解説). https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm (2024年9月27日取得)
- 森田洋司・清永賢二 (1994). 新訂版・いじめ——教室の病い. 金子書房.
- 内閣府 (2022). 人権擁護に関する世論調査 (令和4年8月調査). <https://survey.gov-online.go.jp/r04/r04-jinken/2.html#midashi17> (2024年9月29日取得).
- 奈須正裕・伏木久始 (2023). 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して. 北大路書房.
- Noda, T., Nagaura, H., Fujita, Y., Tsutusmi, T., Asao, Y., Matsuda, A., Satsuma, A., Nakanishi, M., Ohnishi, R., & Takemori, M. (2022). A cross-sectional study of the psychological impact of the COVID-19 pandemic on undergraduate and graduate students in Japan. *Journal of Affective Disorders Reports*, 6, pp. 100282.
- Reicher, S. D., Spears, R., & Postmes, T. (1995). A Social Identity Model of Deindividuation Phenomena. *European Review of Social Psychology*, 6(1), 161-198.
- トイアンナ (2024). 弱者男性1500万人時代. 扶桑社新書.
- Togetter (2024). 「チー牛」への根拠なき誹謗中傷の嵐. <https://togetter.com/li/2331994> (2024年9月27日取得)

- Togetter (2022). チー牛の女版がリアル過ぎて破壊力抜群！『オタク女の友達にこれ見せたらガチトーンで「やめろ」って言われた』. <https://togetter.com/li/1981411> (2024年9月27日取得)
- 山口真一 (2015). 実証分析による炎上の実態と炎上加担者属性の検証. 情報通信学会誌, 33(2), 53-65.

